

調査結果から見えてくるもの

昨年9月に発足した第2期川崎市子どもの権利委員会は、市長から諮問された「子どもの居場所と参加活動の拠点づくり」について審議をするに当たっての基礎資料を得るために、川崎市子どもの権利に関する条例第38条第2項に基づき、平成17(2005)年3月に「川崎市子どもの権利に関する実態・意識調査」を行った。

調査は、子ども、おとな、市職員(学校関係、児童福祉関係(保育所職員、こども文化センター職員等))の三者を対象とし、三者の意識の差も検討できるような質問項目を設定した。調査方法は、無作為抽出法によるアンケート調査である。また、アンケート調査を補足するために、不登校の子ども、多様な文化的背景を持つ子ども、障がいのある子ども、一時保護所や児童養護施設で生活する子どもについて、アンケート調査およびヒアリング調査を行った。

この「調査結果から見えてくるもの」をまとめるにあたっては、各設問で最も多く選択された項目と最も少なかった項目に注目したほか、子ども・おとな・市職員の意識の差が見られる項目ではその対比を行い、さらに、経年変化を見るために設定した調査項目については、平成14(2002)年3月に実施した調査との比較を行なった。また、学校、家庭、その他の場所において、「子どもの居場所」となりうるために必要な条件として、子どもの実態・意識を中心に特徴を抽出した。

なお、不登校の子ども、多様な文化的な背景を持つ子ども、障がいのある子ども、一時保護所や児童養護施設で生活する子どもについてのアンケート調査及びヒアリング調査については、サンプル数等から、以下の分析には加えておらず、第2部で分析している。

1 自己肯定感

(1) 自己肯定感

自分のことを肯定的に捉えている子どもの割合は、「好き」20.3%、「まあ好き」52.6%で、あわせて72.9%であった。これをさらに年齢別に見ると、11歳79.3%、12歳78.5%、13歳70.0%、14歳67.8%、15歳70.7%、16歳69.2%、17歳67.4%であった。年齢が高くなるにつれて、自己肯定感をもつ子どもの割合は、徐々に小さくなる傾向にあり、特に12歳と13歳の間で差が大きくなっている。しかし、全体的に見れば、自分のことを肯定的に捉えている子どもは約7割を占めている。

また、「自分は大切にされている」と感じている子どもの割合は、「感じている」46.6%、「まあ感じている」45.6%で、あわせて92.2%であった。この数値は、前回調査時の割合(76.6%)と比べて15.6ポイント高い。さらに、「生まれてきて(生きていて)よかった」と思う子どもの割合は、「思う」58.4%、「まあ思う」33.0%で、あわせて91.4%であった。

参考までに、川崎市とほぼ同時期に同様の調査を実施している関東地方のA県では、自分のことが「好き」「まあ好き」と回答した子どもの割合は、54.8%であった。

(子ども【問4】【問5】【問6】)

(2) 意識の差

一方で、自分のことを「あまり好きでない」「好きでない」と回答した子どもも、26.8%いた。およそ4人に1人の子どもが自分を肯定できずにいるということは、見過ごせない問題である。

おとな・職員に尋ねてみると、子どもが自分自身のことを「あまり好きでない」「好きでない」と思っていると思う割合は、おとなが7.8%、職員が9.1%と実際の子どもの回答よりも約20ポイント低かった。おとな・職員が思っている以上に、自己肯定感をあまり持てない子どもの割合が大きかった。

(おとな・職員【問4】)

2 子どもの権利及び条例に関する意識

(1) 子どもの権利条例の認知状況

子どもの権利条例を知っていると回答した割合は、子どもが41.0%、おとなが25.7%、職員が96.5%であった。職員の認知度は高かったが、子ども・おとなともに半数に満たなかった。また、前回調査では、子どもが45.2%、おとなが31.0%、職員が96.7%であり、今回わずかだが減少している点が懸念される。

また、子どもの権利条例を知っていると回答した人の認知経路で多く挙げられたものを見ると、子どもでは、「授業、先生の話」(68.5%)「パンフレット、ポスター、広報誌」(49.8%)、おとなでは、「パンフレット、ポスター、広報誌」(66.7%)、職員では、「授業、先生の話」(87.2%)「パンフレット、ポスター、広報誌」(53.3%)「研修、講演会」(32.2%)であった。

一方で、条例に基づく制度の認知状況に関して、「1つも知らない」と回答する割合が、子どもで39.7%、おとなで49.1%と、ともに最も高い回答であった。

子どものなかで認知度の高い制度としては、「子ども会議」(36.4%)であるが(おとなは12.8%)、前回調査と比較すると減少している。ただ、人権オンブズパーソンの認知度については、子ども4.8% 13.1%、おとな11.6% 20.6%、職員46.3% 73.8%と前回調査からいずれも増加している。また、市が条例に基づいて実施する子どもの居場所づくり事業として2003年7月にオープンした「子ども夢パーク」の認知度は、子どもが15.5%(前回比2.3%増)、おとなが19.1%(前回比7.1%増)、職員が64.0%(前回比14.1%増)で、これも前回調査から増加している。

(子ども・おとな・職員【問1】【問2】)

(2) 子どもの権利で子どもにとくに大切だと思うもの

子ども・おとな・職員が最も多く回答しているのが「安心して生きる権利」であった(子ども62.7%、おとな75.5%、職員79.1%)。なお、前回調査においても、子ども・おとな・職員ともに最も多く回答していた(子ども60.0%、おとな74.1%、職員73.4%)。

一方、子どもが比較的多く回答しているものの、おとな・職員の回答が低いものとして、「自分で決める権利」があった(子ども20.7%、おとな9.6%、職員7.8%)。また、「参加する権利」につ

いては、子ども 9.9%、おとな 12.2%が回答しているが、職員では 3.5%にとどまっております。前回調査と同様に設問にある7つの権利群のなかでは一番低い。職員の回答は、「自分で決める権利」「参加する権利」とともに、前回調査を約5ポイント下回った。前回調査と同様に、おとなやとくに職員に子どもの安心・安全という子どもの「保護」を重視する傾向性が見られるとともに、子どもの主体的な活動を支える参加権や自己決定については消極姿勢が見られることが指摘できよう。

なお、「自分で決めたいこと」として、子どもは「つきあう友達」(62.4%)、おとなと職員は「クラブ活動、部活動」(それぞれ70.6%、77.3%)が1番多かった。子どもが多くあげた回答のなかで、おとな・職員の回答が少なかったものに、「寝る時間」(子ども 50.0%、おとな 13.5%、職員 6.5%)「携帯電話を持つこと」(子ども 39.5%、おとな 8.9%、職員 3.5%)「学校での髪型」(子ども 38.1%、おとな 21.7%、職員 20.5%)「学校に持っていったいい物」(子ども 32.7%、おとな 15.0%、職員 7.6%)等があった。

(子ども【問3】【問10】、おとな・職員【問3】【問12】)

3 子どもの権利侵害の実態

(1) つらい体験

「つらくてどうしようもないことを人から言われたり、されたりしたことがある」と回答している子どもは34.1%で、前回調査と比較して5ポイント減少しているが、依然として高い数値である。

一番つらかったこととしては、「友だちや先輩からの無視、仲間はずれ」(33.1%)「友だちや先輩からの暴力、言葉の暴力」(31.7%)が、子どもの回答で多くあげられている。

なお、子どもにとって一番つらかったことについて、職員の場合、「家族からの暴力、言葉の暴力」(28.3%)「家族からの無視、放置」(24.4%)であると思うといった回答が多い。これは、実際の子どもの回答(順に、10.6%、0.3%)よりもはるかに高い割合であった。職員は、子どもにとって一番つらかったことは、家族との関係の中にあると考える割合が高いが、実際子どもに尋ねると、友だちや先輩といった子ども同士の関係のなかにおける体験を多くあげている。おとなの認識と子どもの実際とが食い違いを見せている点の一つである。

(子ども【問8】【問8-1】、おとな・職員【問9】【問9-1】)

(2) つらいときの対処法

「がまんした」という回答が最も多く、40.5%にのぼった。それ以外では、「他の人に相談した」(22.0%)「やめてほしいといった」(13.4%)「しかえしをした」(10.3%)などであった。

また、つらいときの対処法を、子どもの自己肯定感との関係で見ると、「自分のことが好き」と回答した子どものうち、つらいときに「がまんした」と回答する割合が27.8%であったのに対して、「自分のことが好きでない」と回答した子どものうち、つらいときに「がまんした」と回答する割合は50.0%であった。また、「自分のことが好き」と回答した子どもが、「他の人に相談した」と回答する割合が24.1%であったのに対して、「自分のことが好きでない」と回答した子どもが、「他の人に相

談した」と回答する割合は14.5%であった。自己肯定感が低い子どもは、自己肯定感が高い子どもに比べて、他の人に相談する割合が低く、がまんする割合が高い。他の人に相談せずに、がまんすることが、自己肯定感の回復あるいは向上を妨げていることも可能性の1つとして推測される。

(子ども【問8-2】)

(3) 体罰

「子どもをたたくことがある」「まあある」割合は、おとなが20.5%、職員が11.1%であった。「ない」と回答した割合は、おとなでは48.3%、職員では59.6%にとどまっている。また、子どもをたたく理由としては、「悪いことをしたから」(おとな 59.0%、職員 50.8%)「しつけとして」(おとな 50.4%、職員 34.4%)「言葉でいってもわからないから」(おとな 44.4%、職員 44.3%)をあげる回答が多い。おとな・職員のなかには、体罰を教育・しつけと認識し、体罰を肯定・容認している割合が一定数いることがうかがえる。なお、前回調査と比較すると、おとなの場合、「子どもをたたくことがある」が2.0% 8.6%と増えている一方で、「ない」が28.9% 48.3%も増加している。

なお、上述のように、おとなで20.5%、職員で11.1%が「子どもをたたくことがある」「まあある」と回答しているが、子どもが「一番つらかったこと」として「家族からの暴力、言葉の暴力」「学校の先生からの暴力、言葉の暴力」をあげる割合は、それぞれ10.6%、3.9%である。家族や学校の先生からの暴力以上に、子どもが友人や先輩からの無視・仲間はずれ、暴力を「一番つらいこと」にあげている。そのことは、次の「4 子どもの居場所の実態」でも見られるように、親・教師との関係とともに、いかに子どもたちにとって友人関係が重要かを物語っている。

(おとな・職員【問10】【問10-1】)

4 子どもの居場所の実態

(1) 家庭

家はホッとでき、安心していられるところだと「思う」と回答する子どもの割合は61.4%、「まあ思う」割合は32.4%であった。年齢別にみても、11歳～17歳のすべての年齢において、9割以上の子どもが、家庭は安心していられるところであると回答している。

(子ども【問12】おとな【問14】職員【問16】)

家庭が安心していられる理由

家庭が安心していられるところである理由として最も多い回答は、子ども・おとな・職員ともに「家族と一緒にいられるから」であった。しかし、その割合は、子どもと、おとな・職員との間で大きな差があり、おとな・職員が思うほどには高くなかった(子ども 45.7%、おとな 68.8%、職員 73.2%)。

子どもがあげる理由で多い回答としては、「休んで元気をとりもどせるから」(42.6%)「自由に活動できるから」(39.1%)があげられた。

一方で、「自分が出せるから」を理由にあげた子どもは、おとな・職員が思うほどには高くなかつ

た(子ども 18.1%、おとな 27.6%、職員 41.1%)。逆に、おとな・職員に比べて子どもの回答が多い理由として、「自由に活動できるから」(子ども 39.1%、おとな 15.2%、職員 12.7%)「ひとりになれるから」(子ども 14.8%、おとな 5.0%、職員 2.3%)があった。子どもはおとな・職員よりも、家庭で「自由に活動できる」、「ひとりになれる」というような要素に重きを置いていることがうかがえる。

(子ども【問12-1】おとな【問14-1】職員【問16-1】)

(2) 学校

学校はホッとでき、安心していられるところだと「思う」子どもが 28.8%、「まあ思う」子どもが 46.8%、あわせて 75.6%あった。また、年齢別にみても、11歳～17歳のすべての年齢で、「思う」「まあ思う」割合が、「あまり思わない」「思わない」割合をかなり上回った。

これに対して、おとなが子どもにとって学校がホッとでき安心していられる場所になっていると「思う」割合は 13.8%、職員は 8.5%と低かった。

また、安心して居られる場所として、学校のなかの具体的な場所を尋ねると、69.3%の子どもが「教室」と回答している。回答はほぼこの選択肢に集中し、次に多い回答は「体育館、グラウンド」で 6.6%であった。

(子ども【問13・13-1】おとな【問15・15-1】職員【問17・17-1】)

学校が安心していられる理由

子どもが学校を安心していられるところだと思う理由としては、「友だちがいるから」が 86.6%と最も多い。

その他に多い回答としては、「自由に活動できるから」(20.0%)「困ったときに相談できる人がいるから」(15.9%)「自分が出せるから」(13.6%)があげられる。

おとな・職員に、子どもにとって学校が安心していられる理由を尋ねたところ、やはり最も多い回答は「友だちがいるから」であった。しかし、おとな・職員があげる次に多い回答は「先生がいるから」(おとな 27.2%、職員 22.4%)で、これを理由としてあげた子どもの割合は、9.3%とおとな・職員の半分以下であった。

子どもが安心していられるところだと感じられるためには、「友だち」の存在が大きいことが見てとれる。「先生」の存在については、おとな・職員が思うほどには、子どもが学校に安心していられる理由とはなりえていないことがわかる。

(子ども【問13-2】おとな【問15-2】職員【問17-2】)

(3) 家庭・学校以外で安心していられるところ

家庭や学校以外でホッとでき安心できる場所として、子どもが多くあげる回答は、年齢に関係なく、「友だちの家」「祖父母の家」が多かった。一方で、家庭・学校以外で安心していられるところは「とくにない」とする回答が 22.3%もあり、年齢が上がるにつれて高くなっている。

同じ質問をおとな・職員にしたところ、子どもと同様に、「祖父母の家」(おとな 53.8%、職員 61.3%)や「友だちの家」(おとな 42.7%、職員 41.1%)という回答を多くあげているが、その割合は、実際の子どもの回答よりも高い。逆に、おとな・職員が、子どもには家庭や学校以外でホッとでき安心できる場所は「とくにない」と回答する割合は、子どもの回答よりもかなり低かった。

子どもが安心していられるところに対する認識に関して、子どもの感じ方と、おとな・職員の子どもの捉え方とにズレがあることがわかる。

(子ども【問 14・14 - 1】おとな【問 16・16 - 1】職員【問 18・18 - 1】)

(4) 主に子どもが利用する施設等

こども文化センター

こども文化センターを「利用する」「まあ利用する」と回答する子どもは、合わせて 19.7%であった。利用度を年齢別に見ると、11 歳、12 歳が比較的利用し、年齢が上がるにつれて利用しなくなる。

利用しない理由としては、「そもそも存在を知らない」とする回答のほか、「おもしろくない・飽きた・つまらない」「年齢的にあわない」といった活動内容に関するもの、「時間がない」「遠い」といった物理的な理由があげられている。

(子ども【問 18・18 - 1】おとな【問 20・20 - 1】職員【問 22・22 - 1】)

子ども夢パーク

「2-(1) 子どもの権利条例の認知状況」で述べたように、子ども夢パークの認知度は、前回調査と比較してわずかながら増加している。そこで、次に利用状況を尋ねたところ、「利用する」「まあ利用する」と回答した子どもは、3.2%であった。「利用しない」「あまり利用しない」と回答している子どもは 96.3%である。

利用しない理由としては、「どこにあるかわからないから」(73.2%)「何をしているかわからないから」(46.2%)「利用方法がわからないから」(33.5%)のほか、自由記述では「そもそも存在を知らない」「行く時間がない」「遠い」という回答が多かった。

(子ども【問 19・19 - 1】おとな【問 21・21 - 1】職員【問 23・23 - 2】)

(5) 自分の話したいことをなんでも話せる人

「いる」とする回答が 83.5%、「いない」とする回答が 16.1%であった。

具体的には、「友だち」と回答する子どもの割合が 80.7%と最も大きかった。次いで「親」(61.3%)「兄弟姉妹」(25.5%)と続いている。

子どもにとって話したいことをなんでも話せる人として、おとな・職員が最も多くあげたのは「親」(おとな 73.4%、職員 82.1%)で、子どもが「親」をあげた割合は、これより 20 ポイント低かった。このようなズレが見られるものとして、「学校の先生」(子ども 13.7%、おとな 12.4%、職員 33.2%)についても同様で、職員の 3 割が「学校の先生」とあげているものの、子どもが「学校の先生」をあげた割合は、それより 20 ポイント低い結果となった。

子どもにとって、「友だち」の存在が大きいことがうかがえる。

(子ども【問15・15-1】おとな【問17・17-1】職員【問19・19-1】)

5 子どもの参加

(1) 学校における参加

学校の生活等について、機会があれば発言してみたいと「思う」「まあ思う」と回答した子どもは、あわせて49.3%で、前回調査と比べて11.5ポイント上がった。また、学校の生活等についての話し合いの場に子どもが参加することが必要だと「思う」「まあ思う」と回答したおとなは78.9%、職員は84.5%と、子どもの参加に対するおとな・職員の意識がかなり高い。ただ、前回調査に比べると、「思う」の割合がおとな48.6% 42.7%、職員45.4% 36.0%と減少している。

参加したいと「あまり思わない」「思わない」と回答した子ども(50.5%)の理由としては、前回調査同様、「めんどくさいから」(54.8%)「目立ちたくないから」(22.9%)が多くあげられた。また、今回の調査では、「意見を言ってもきいてくれないから」(10.2%)「学校生活に期待していないから」(10.9%)といったあきらめを含む回答は、前回調査と比べてかなり減少している。さらに、今回の調査で新たに選択肢として設けた「話し合うための必要な情報がないから」「話し合う方法がわからないから」といった参加方法・手段に関する回答は、それぞれ19.9%、14.5%であった。

(子ども【問16・16-1】おとな【問18】職員【問20】)

(2) 地域における参加

地域の環境や活動について自分の意見を発言してみたいと「思う」「まあ思う」と回答した子どもは、あわせて43.7%で、前回調査と比べて6.8ポイント上がった。

参加したいと「あまり思わない」「思わない」と回答した子ども56.1%の理由としては、「めんどくさいから」(51.0%)「意見を言うために必要な情報がないから」(30.9%)が多くあげられた。その他、「知っている人がいないから」についても、11.1%の子どもが回答している。

(子ども【問21・21-2】おとな【問20】職員【問22】)

6 おわりにかえて

子どもが安心していられる居場所とは

調査結果から見えてくる、11～17歳の子どもにとって子どもが安心していられる居場所に必要な条件として、家族や友人など自分を受け入れてくれる人がいる、自分が出せる、休んで元気を取り戻せる、自由に活動できるというような点があげられよう。これらは、子どもの居場所づくりを進める上で、欠くことのできない重要なポイントであるといえる。子どもの権利条例の前文、第2章、第27条の理念や規定をふまえると、これらのポイントの重要性と意義がいつそう認識されるであろう。

子どもの参加の必要性について

第1期子どもの権利委員会の検証テーマであった「子どもの参加」については、子ども自身の意欲の点で、わずかながらではあるが前進が見られる。今後このような方向性をより推進していくためにも、参加方法・手段に関する情報提供のあり方や内容について検討することや、「めんどくさい」「目立ちたくない」「知っている人がいない」ことを理由に参加をためらう子どもの心理を、子ども同士の関係性に焦点をあてながら、分析していくことなどが必要であろう。

また、子どもと、おとな・職員の認識や意識には、どうしてもズレが生じる可能性があることへの理解・認識が重要である。この認識・意識のズレにより、おとながしばしば子どものためによかれと思って実行したことが、子どもにとって必ずしも必要ではない状況が生み出されることになりうる。そのような状況を避け、より有効な施策を実行していくためにも、「子どもの参加」が必要不可欠となるであろう。

子どもをとりまく関係性の重要さ

今回の調査によれば、学校や地域における子ども参加に多かれ少なかれ意欲をもつ子どもはおよそ半数で、残りの半数は、参加方法・手段に関する情報の不足から、あるいは「めんどくさい」「目立ちたくない」「知っている人がいない」等の理由から、参加への意欲がない。

前回の調査では、「めんどくさい」という子どもの言葉の裏に「疲れ」などを見出し、子どもの過密な生活の見直しや子どもの休息権・余暇権の保障を検討すべきであることが指摘されている。今回の調査からは、「めんどくさい」という言葉には、参加の活動や取り組みのなかで「新たな人間関係を築くことへの煩わしさ」が含みこまれているように見受けられる。「3.子どもの権利侵害の実態」の1で指摘したように、一番つらかったこととして子どもが最も多くあげるのは、子ども同士の関係における体験であった。その一方で、「4.子どもの居場所の実態」の2に見られるように、学校が安心していられる理由で最も多いのは「友達がいるから」であった。子どもにとっては、友だちとの関係性が最大の関心事といってよいであろう。また、「4.子どもの居場所の実態」の1、2で指摘したように、家庭や学校が安心していられる理由として、「家族と一緒にいられるから」「先生がいるから」と回答する子どもが、おとなが思うほどには高くない現状が明らかになった。

子どもにとって、その場所が安心していられる居場所と感じられるには、子どもをとりまく関係性が重要であるといえよう。よい関係を築くことができる場は子どもにとっての居場所となることが指摘できる。